台湾における短歌

—— 補完すべき視点

Yenhung LAI

(賴衍宏 : Associate Professor of Department of Japanese Language and Literature, Providence University)

✉ yhlai@pu.edu.tw

(台湾) 静宜大学日本語文学系副教授。東京大学で2008年「日本語時代の台湾短歌——結社を中心にした資料研究」で博士号取得。比較文学。主著に「日本文学管見——和習・短歌・作品論」(新北：尚昂文化、2015)、「法隆寺薬師仏光背銘新論」(『日本研究』第58集、京都：国際日本文化研究センター、2018)、「台湾における皇民化運動——政策の形成と短歌の広がり」(『跨境／日本語文学研究』第9号、ソウル：高麗大学校日本研究センター、2019)など。

The Tanka in Taiwan : A Multi-Dimensional Perspective

To this point there have not been many studies on the Taiwanese short poems (tanka) written during the Japanese Occupation. In this study we focus on two pieces of research from 1927 and 1944, and verify the information provided in them. Our findings suggest that unless more attention is paid to the legacy of the field of poetry in Taiwan, the multidimensionality of Taiwanese literary work will likely be unappreciated. Moreover, if high quality translations, imbued with a rich understanding of the body of work in this field, are not carried out, many researchers of Taiwanese poetry who are not proficient in Japanese may produce misguided work.

Keywords Historic Remains(古跡), Bilingual Stone Monument(バイリンガル石碑), Saito Isamu(齋藤勇), Greater East Asia Writers' Conference(大東亜文学者会議), Mistranslation(誤訳)

1 はじめに

台南では、史跡に短歌が含まれているにもかかわらず、戦後になってからは一般に認識されておらず、解説板においても黙殺されている。戦前の短歌創作を促す檄文が近年中国語に訳されており、台湾文学館の出版品になっているが、誤植・誤認・誤訳があるようで研究の妨げになりかねない。つまり、台湾における三十一文字という視点が欠落してきたため、そのような羽目に陥ったらしい。この状況をそのまま放置しておいてよいだろうか。本稿では、欠落部分にメスを入れるべく一次資料を掘り下げたうえで、翻刻・増補・改訳などの必要性を提起したい。

2 無視されている歌碑

台湾の歌碑研究に関しては、筆者はすでに「台湾の日本語歌碑——百年の光と影」¹で「台湾歌碑調査一覧表」にまとめた。ところが、2018年5月21日に台南短歌会代表を取材するために待機していた昼休みに、何気なく国定古蹟五妃廟を散策したところ、この表を追補するチャンスに恵まれた。

そもそも廟の右側に1927年に成立した「五妃之碑」(【図1】)があることについては、既に知られている。台南州知事喜多孝治が撰した漢詩文は、493字の散文と64字の韻文からなっている。まず、その一部を掲げておこう。

【図1】五妃之碑

死生大矣、名節重矣、死而得處、殉而全節、其感人洵非偶然、孔曰：成仁！孟曰：取義！當明之末、寧靖王為國殺身、五妃從王俱死(略)聞見之人莫不流涕云：嗚呼！其義氣貞操世熟亦與爭烈哉！爾後世君子之過嵌訪古者、咸皆莫不頂禮於五妃墓、蓋其貞節之操、誠有足令人感動者也。(略)室人愛枝忝為愛國婦人會臺南州部長、偶訪其地、視察現狀、感慨久之、低回不能去、乃不敢漠然默息、率先提倡、圖之修復、(略)於是荒陋祠宇、一時煥然、改其氣象、差可以妥其英靈、且存其勝蹟、併供來訪者之憑弔矣、後有作者、同心克繼、以持諸久遠、是余之所企望焉、因而讚之曰

(死生大なるかな、名節重なるかな、死して処を得、殉じて節を全うし、其の人を感ぜしむるは洵に偶然にあらず。孔曰はく、仁を成せ！孟曰はく、義を取れ！明の末に当たりて、寧靖王国の為めに身を殺し、五妃王に從ひて俱に死す(略)聞見の人涕を流さざるはなく云はく、嗚呼！其の義氣貞操、世

¹ 黄自進編『日本の伝統と現代』(中央研究院人文社会科学研究中心垂太区域研究專題中心、2011)、pp.330-332所収。

にたれか亦たともに烈を争はんや！爾後世の君子の（節）を過ぎて古を訪ぬる者は、みな五妃墓に頂礼せざるはなし、蓋し其の貞節の操、誠に人をして感動せしむるに足るもの有る也。（略）室人の愛枝（つま）忝くも愛国婦人会台南州部長たり、偶其の地を訪れ、現状を視察し、感慨之れを久しくして、低回して去る能はず、乃ち敢へて漠然と黙息せず、率先して提倡し、之れの修復を図り（略）是に於いて荒陋なる祠宇、一時に煥然たり、其の気象を改め、なほ以て其の英霊を（おさ）安すべし、且つ其の勝蹟を存し、併せて来訪者の憑弔に供せん、後に作者有らば、心を同じうして克く継ぎ、以て久遠に持す、是れ余の企望の所、因りて之れを讃へて曰はく）

鯤海之濤、桂卓之邵、老榕鬱蔥、維五妃廟、庭無間言、娣姒貞淑、婦道相修、世家緝穆、一朝國難、偕殉王室、嗚呼烈哉、節操無匹、爰修其藏、吾銘其石、芳香遠馨、永世無斁

（鯤海の（みづ）濤、桂卓の（しやう）邵、老榕鬱蔥、これ五妃の廟、庭に間言無く、娣姒貞淑、婦道を相修め、世家緝穆く、一朝の国難に、偕に王室に殉ず、嗚呼烈なるかな、節操たぐひなし、爰に其の藏を修め、吾其の石に銘す、芳香遠く馨り、永世に（おとこ）斁ること無からん）

仔細に観察すれば、碑身の下半部に切断の痕がある。これは1950年代半ば頃受難に遭ったのではないだろうか。まず、1953年頃、連景初「五妃墓」³によって、「台南州知事日人喜多孝治、墓の左側に「五妃之碑」を立てり（碑は漢文、現に尚存ず）」との指摘がなされた。1955年夏になると、初めて政治権力が介入し、その存在が危ぶまれるようになる。「五妃永留節烈 何須日吏豎碑 南市将改豎新碑」⁴（五妃永く節烈を留め 何ぞ須あん日吏が碑を豎てるを 南市将に改めて新碑を豎てんとす）と題する以下の新聞記事を見てみよう。

台南市の有名な史跡である五妃廟は、清人が節に殉じた五妃を記念し、我が中華女子の節烈美德を顕彰する遺跡である。市議会は、日拠時代台南州知事喜多孝治が改めて新碑を監め、光復して今迄十載、尚いまだに一掃しないとして、第三回一次大会の決議を経て、市府に日人の豎てた石碑をすっかり取り除き、別の新碑を立て、以って外観を壮んにするよう要請した。市府は文献館に、歴史館と共同で拓本をとった後、石碑を取り壊して、短期間に別な新碑を豎てるよう命じた。

戦後の台南市議会は脱日本化とともに再中国化を強めるために、日本統治時代の日本人知事が書いた漢文碑を除去すべしという議案を採択した。そのとおりに、市政府側は執行に踏み切った。この場合、たとえ漢文の碑であっても、日本人の造ったものだからとにかく目障りだという、いわば水に落ちた犬を叩くよ

2 白川静『金文の世界：殷周社会史』（平凡社、1971）、p.153.

3 『台南文化』第9巻第1期、1953.9. 原文：「台南州知事日人喜多孝治、（五）五妃之碑」於墓之左側（碑為漢文現尚存）。

4 『聯合報』1955.6.19. 原文：「台南市著名古蹟五妃廟，係清人紀念殉節五妃，表揚我中華女子節烈美德的遺跡，市議會以該廟五妃墓碑於日拠時代台南州知事喜多孝治改豎新碑，光復迄今十載，尚未清除，經三屆一次大會決議請市府將日人所豎石碑拆除，另立新碑，以壯觀瞻，市府經飭令文獻館會同歷史館拓模後，予以拆除，短期內另豎新碑」。

うな迫及の姿勢が認められる。したがって、碑身の裂け目は明らかに中国国民党政権下の脱日本化の痕跡といえるものである。

その後、民主化運動が徐々に進み、戒厳令も解除された。時代の空気が変わっていくなかで、「五妃之碑」も現状のように復元されることになった。しかし、そのプロセスでは欠落がなかったわけでもない。何年も修理を怠った後、台南市政府はようやく工事を請負に出した。楊仁江(撰文撮影)『五妃廟修護工程工作報告書』⁵によると、「五妃之碑」は「碑陰に字有れどすでに識るべからず」という状態だった。つまり、裏側に文字があるにもかかわらず判読するのが難しいとの悲嘆である。その精度を高めるべく、筆者はまず写真(【図2】)を撮った。

【図2】五妃歌碑

そしてさらに、三つの文献と突き合わせてみた。

- (1) 愛国婦人会台南州部「五妃廟修築の由来」⁶：

五妃廟修覆記念献詠

みさを高き五妃のたまやは色かへぬ丘へのまつといや榮えなむ

- (2) 野田八平「五妃之墓の由来」⁷：

五妃を吊ふ詣でられし方々の献詠歌集

みさを高き五妃のたまやは色かへぬ丘へのまつといや榮えなむ

- (3) 大橋捨三郎『愛国婦人会 台湾本部沿革誌』⁸：

みさを高き五妃のたまやは色かへぬ丘への松と弥榮えなむ 喜多愛枝

よく比べると、(1)と(2)は歌題が違うだけで表記が同じである。(3)のほうは漢字が多用されている。歌碑は、(1)に基づいて作成されたのではないだろうか。仔細に検討した結果、変体仮名を交えつつ、「色」「丘」「榮」を「いろ」「をか」「さか」に直して出来たのが、以下の碑歌であろうと思われる。

みさを高き五妃のたまやはいろかへぬをかへのまつといやさかえなむ

1927年10月に石碑が落成する前に、喜多孝治はすでに「樺太庁長官」⁹になった。だから、式場に「喜多前知事夫婦」¹⁰として「祝電」を打ったと報じられてい

⁵ 楊仁江(撰文撮影)『五妃廟修護工程工作報告書』(台南市政府, 1998), p.81. 原文:「碑陰有字已不可識」。

⁶ 『台湾教育』第309号, 1928.5.

⁷ 『台湾教育』第384号, 1934.7.

⁸ 大橋捨三郎『愛国婦人会台湾本部沿革誌』(愛国婦人会台湾本部, 1941), p.234.

⁹ 人事興信所編『人事興信録』第8版(人事興信所, 1928), p.35.

¹⁰ 「五妃廟重修 竣工祭典 頗呈盛況」(『台湾日日新報』1927.10.11., 夕刊)。

る。してみれば、表側の漢詩文は元台南州知事喜多孝治、裏側の和歌は元知事夫人喜多愛枝によって書かれたことになる。政府高官の夫婦碑文とは、あまり類例を見ない。両者の文面を通読すると、呼応関係が認められよう。

- ① 和歌の初句「みさを高き」は、「操高き」だが、これは漢文の「其義氣貞操世熟亦與爭烈哉」(其の義氣貞操、世にたれか亦たともに烈を争はんや)「蓋其貞節之操、誠有足令人感動者也」(蓋し其の貞節の操、誠に人をして感動せしむるに足るもの有る也)と漢詩の「節操無匹」(節操たぐひなし)と同じ讃え方をしている。
- ② 和歌の第二句「たまや」は、辞書¹¹⁾によると、「靈屋」という漢字が当てられ、「靈廟」を意味するところである。これは漢文の「於是荒陋祠宇、一時煥然」(是に於いて荒陋なる祠宇、一時に煥然たり)と漢詩の「維五妃廟」(これ五妃の廟)と同じ施設を詠じている。
- ③ 和歌第四句の「丘へ」は「丘辺」を意味するものである。これは漢詩における「桂阜」(桂子山の丘¹²⁾)と同じ地形を詠んでいる。
- ④ 和歌第四句の「まつ」と第五句の「さかえ」は「松」「栄え」を指している。これを漢詩の一節「老榕鬱蔥」と比べると、両方ともこんもりした常緑高木に眼差しを注いでいる。

如上の一致からすれば、両者は表裏一体となって、支配下の台南における史跡の魅力を謳歌する漢和バイリンガルの力作だといえよう。だが遺憾ながら、何培夫(編)『台湾地区現存碑碣図誌：台南市』¹³⁾には漢文碑しか収録されていない。五妃廟の解説板も専ら漢文碑に限っての紹介にすぎず、三十一文字には一切言及されていないのが現状である。影響の及ぼすところ、第38届「巫永福文学奨」を受賞した邱致清の小説『水神』¹⁴⁾において、作者の姓名である「喜多愛枝」は「室人愛枝」と誤記されているばかりでなく、あったはずの短歌も全然取り上げられていない。ここで、石碑の意匠に合わせて解説板の裏側にも和歌の釈文と翻訳¹⁵⁾を追加することを提言したい。

3 誤認されている台湾代表

台湾における短歌創作運動を呼びかけるために、齋藤勇が戦前に書いた「東洋の真珠」なる一篇がある。近年、その中国語全訳版が完成した。「日本統治時代における台湾の文化史、思想史、ないし社会史を理解するための上級書であり、必読の本」¹⁶⁾という評価を得た、黄英哲(編)『日治時期台湾文芸評論集(雑誌篇)』第四冊(国家台湾文学館籌備処、2006)、pp.513-518。

- 11 新村出『広辞苑』第5版(岩波書店、1999)、p.1676。
- 12 (梁)蕭統編『文選全訳1』(貴州人民、1994)、p.444。注釈の原文：「阜：丘也」。
- 13 何培夫編『台湾地区現存碑碣図誌：台南市』(国立中央図書館台湾分館、1992)、p.148。
- 14 邱致清『水神』(麦田、2016)、pp.2-202。
- 15 頼訳：節操真崇高、五名妃子合祠堂、守本色初衷、冀能与桂阜松樹、越堯興盛更繁榮。
- 16 陳淑容「〈日治時期台湾文芸評論集・雑誌篇〉」(『台湾文学館通訊』第15期、2007.5)。原文：「是理解日治時期台湾文化史、思想史乃至社会史的進階書、必讀書」。
- 17 黄英哲(編)『日治時期台湾文芸評論集(雑誌篇)』第四冊(国家台湾文学館籌備処、2006)、pp.513-518。

(1)「原刊於《臺灣文藝》1：7，1944年12月28日」¹⁸という書誌説明がある。ところが、奥付を確かめたところ、「東洋の真珠」が掲出された「第一巻第六号」は「昭和十九年十一月廿九日印刷」で、「十二月一日発行」された雑誌である。したがって、「原刊於《臺灣文藝》1：6，1944年12月1日」と訂正せねばならないだろう。

(2)作者に関しては、「齋藤勇(1887-?)」¹⁹という人名の下に、次のような学歴・経歴が記されている。

英文学者。東大英文科卒業，成為東京女高校教授、東大教授。其間曾赴英国、法国、美国留学，取得文学博士。中学時代対文学產生興趣，広読外国作品，成為日後成為英文学者的重要契機。另外在学期間受洗成為基督教徒，並鑽研許多哲学宗教書籍，奠定他日後研究基督教与英文学關係的基礎。另外他亦擅長詩歌研究，撰述許多英詩評論与研究。著有《英詩鑑賞》，《英詩概論》等。另有《基督教思潮》，《基督教中心問題》等宗教性研究。

辞書²⁰を調べると、「齋藤」という親見出しのもと、「たけし【齋藤勇】◎一八八七—一九八二英文学者。福島県生まれ。東大教授」とある。しかし、素朴な疑問だが、台湾経験が一つも含まれていないこの人物が、なぜ突如として台湾の雑誌に投稿したのだろうか。恐らく彼は、北原白秋と名刺交換をした際に、誤解されてしまったもう一人の齋藤勇ではないだろうか。奥付どおりに書けば齋藤勇『見えざる人』²¹になるが、この齋藤勇の回顧によると、「名刺がとりつがれた時、英文学者に同姓同名の人がいるので、とりちがえて君の若いのにびっくりしたと白秋がいった」という。してみれば、戦前発生した白秋の齋藤勇誤認事件は戦後の『日治時期台湾文芸評論集(雑誌篇)第四冊』で再び繰り返されたのだといわざるをえない。その理由は、端的に言うと、齋藤勇「東洋の真珠」²²に「曾て西班牙人ロワイサは、この小詩形を壁にたぐへて、「東洋の真珠」と称んだが、この比喩はやや我が意を得たものといへようか」という短歌の美称比喩が、そのまま戦後の『見えざる人』²³に「彼等の目には、西班牙人 Francisco A. Loayza がいみじくも讃えたように Perlas de Oriente「東洋の真珠」として映ずるのである」というように再度導入されたからである。したがって、「東洋の真珠」の原作者は「現代短歌辞典」²⁴の「齋藤勇 明治37年山形生れ」、「台湾」を創刊、「著書、『雪をんな』『母川回帰』『見えざる人』等」に従うべきである。同じ漢字とはいえ、名字の訓読みは違うし、生年も異なっている。取り違えられてしまった本当の齋藤勇は、1904年日本に生まれて、1937～1945年台湾の歌壇で短歌集と短歌雑誌を編集出版する間に1943年大東亜文学者決戦会議の台湾代表として活躍したが、1946年日本に引き揚げざるをえなかった台湾屈指の歌人なのである。これだけの重要人物であるにもかかわらず、長い間ずっと誤解されてきた。このような誤情報も、日本統治時代の台湾文壇研究を遅らせる一因となっているのではないだろうか。

18 注17, p.518.

19 注17, p.554.

20 松村明編『大辞林』(三省堂, 1988), p.946.

21 齋藤勇『見えざる人』(新星書房, 1973), p.18.

22 齋藤勇「東洋の真珠」(『台湾文芸』第1巻第6号, 1944.12), p.8.

23 注21, p.226.

24 島海昭子「齋藤勇」(『短歌』第25巻第10号, 1978.9).

【図3】 齋藤勇(前列左端)と北原白秋(同右端)

(3)「東洋の真珠」²⁵では、短歌創作運動の理念が次のように述べられている。

²⁵ 注22, p.10.

²⁶ 注17, p.516.

²⁷ 頼衍宏「台湾における皇民化運動：政策の形成と短歌の広がり」(『跨境／日本語文学研究』第9号, 2019.12), p.83

²⁸ 注22, p.10.

²⁹ 注17, p.516.

それゆえ、本島、朝鮮に於ける同胞が、伝統と表現の獲得に血みどろの精進を続けながら、一步一步作歌を通じて真のみ民の道に到り着かんとする熱情もまた、根拠を此処に求める事が出来よう。

特に、下線部分は、訳者邱香凝・校訳涂翠花によって「透過詩歌的創作、一步一步到達成為真正國民之路的熱情」²⁶と訳されている。「み民」は「皇民」²⁷を意味する語だから、「透過詩歌的創作、一步一步到達成為真正皇民之路的熱情」と修正したほうがよいだろう。

(4)「東洋の真珠」²⁸では、引き続き高砂族出身の秀歌が取り上げられている。

忍び難き今日まで忍び来ましゝと宣らす畏こさに泣かざらめやも
日の本の空を覆へる雨雲を払へと宣らす撃たざらめやも

中国語訳と比べてみよう。

詔曰、縦是艱苦難耐、已然堅忍至今。聞者莫不感激涕零。詔曰、日落之國、雲雨覆天、驅之！聞者莫不迎頭痛擊²⁹。

訳文の場合、改行しないため、一首の詩歌という錯覚を与えやすい。「日の本」も「日落之國」と誤訳されてしまっているため、いかにも不可思議である。

このように、文章の出所・作者の正体・言葉の奥義・短歌の区切り等々、いずれも改善の余地があるといわざるをえない。だがとりわけ最も常規を逸しているのは、齋藤勇の帽子が齋藤勇にかぶせられてしまったことではないだろうか。もし再版する場合、訂正すべきところを訂正するのがベストだろう。

4 おわりに

以上の考察を経て、筆者の意見は次の二点にまとめられる。

- (1)一旦壊された後に復元された、元州知事夫婦による表側漢詩文・裏側短歌の石碑がある。後者のみ、まだ字句が明らかにされていない。ゆえに、解説の板に必要な情報を追加するようにと、台南市政府に提案したい。
- (2)政府が戦前の短歌に関する文章を翻訳出版する際、書誌・作者・語彙・形式に関するミスを防ぐために、もっと対策を講じるべし、と国立台湾文学館に献言したい。

台湾の古蹟の重要な一面が無視されたり、大東亜文学者会議の台湾代表が誤解されたりする現状は、台湾における三十一文字の研究が依然として軽視されていくかぎり、その後遺症を随所に残していくのではないかと、深く憂慮する次第である。

付記 本稿は高雄餐旅大学「2020年応用日語国際学術研討会」(11月7日)での口頭発表を補訂したものである。

参考文献(Bibliography)

- 大橋捨三郎(1941)『愛国婦人会 台湾本部沿革誌』, 台北: 愛国婦人会台湾本部. Ohashi, Sutesaburo (1941) *Aikoku Fujinkai Taiwan Hombu Enkakushi* Taipei: Aikoku Fujinkai Taiwan Hombu.
- 何培夫(1992)『台湾地区現存碑碣図誌: 台南市』, 台北: 国立中央図書館台湾分館. He, Peifu(1992) *Taiwandiquxiancunbeijietuzhi: Tainanshi*, Taipei: Guolizhongyangtushuguantaiwanfenguan.
- 黄英哲(2006)『日治時期台湾文芸評論集(雑誌篇)第四冊』, 台南: 国家台湾文学館籌備処. Huang, Yingzhe(2006) *Rizhishiqitaiwanwenyipinglunji/Disc4*, Tainan: Guojitaiwanwenxueguanchoubuchu.
- 齋藤勇(1944)「東洋の真珠」, 『台湾文芸』第1巻第6号, p.8. Saito, Isamu(1944) *Pearls of the Orient, Taiwanbungei* Vol.1-6, p.8.
- 楊仁江(1998)『五妃廟修護工程工作報告書』, 台南: 台南市政府. Yang, Jenchian(1998) *Repair and maintenance project work report for Wufei Temple*, Tainan: Tainan City Government.
- 頼衍宏(2019)「台湾における皇民化運動: 政策の形成と短歌の広がり」, 『跨境/日本語文学研究』第9

号, p.83. Lai, Yenhung(2019) The Kominka Movement in Taiwan: Policy Formulation and the Spread of the Tanka, *Border crossings*, Vol.9, p.83.

賴衍宏 (2011) 「台湾の日本語歌碑——百年の光と影」, 黃自進編『日本の伝統と現代』, 台北: 中央研究院人文社会科学研究中心垂太区域研究專題中心, pp.330-332. Lai, Yenhung (2011) Taiwan's Japanese Tanka Monument Japanese Tradition and Modernity, ed. Huang Tzuchin, Taipei: Sinica, pp.330-332.